

比較文化論 : 大項目別報告 : 家具・道具 2200

著者	木内 裕子
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	011
ページ	80-82
発行年	1990-03-10
URL	http://doi.org/10.15021/00003679

家具・道具 2200

木 内 裕 子*

- | | |
|------|----------|
| 1. 錐 | 4. 油脂ランプ |
| 2. 斧 | 5. 木鉢 |
| 3. 枕 | 6. うるし技法 |

1. 錐

錐は、2項目とも出現件数はさほど多くなく、両項目とも保有する民族が8例ある。しいていえば、もみ錐はインドネシアで比較的優勢である。また、メラネシアはどちらの型の錐も1例ずつしか出現しなかった。他の項目との相関という意味では、どちらの型の錐もタロイモ栽培民文化の中で見出される。

2. 斧

斧は、新石器時代から作物の栽培や木製品の製作などに使われてきたが、その他に武器や儀器としての用途も含む。貝製のものはアンダマン諸島、スラウェシ、ミクロネシア、ポリネシア、メラネシア、ニューギニアなどに分布している。ハワイのような火山島にも見られるが、ツアモツやミクロネシアのように堅い石のないサンゴ礁の島々に多く見られるのが特色である。一方、石製の斧は東南アジア山地部、インドネシア、ニューギニア、ポリネシア、メラネシアに多く見られ、またオーストラリアにも多少見られる。しかし、ミクロネシアには分布していないのが特徴的である。貝斧も石斧もタロイモ栽培との相関性が割合に高い。また石斧では掘棒との相関もあるので、この点も石斧をもつ民族がタロイモを主とした根栽栽培民に多く見られることを裏付けていると思われる。

着柄についてはとくに有意なデータは、膝折柄と垂直柄に刃をはめこむ方法である。

* 東京大学教養学部

前者はインドネシア、ミクロネシア、ポリネシア、メラネシア、ニューギニアに多く見られ、後者はアッサム、ビルマ山地部、インドネシア、ニューギニアなどに比較的多く見出される。ハイネ＝ゲルデルン (Heine-Geldern, R.) によれば、膝折柄はインドネシア、マレー半島に多いとあり、[ハイネ＝ゲルデルン 1942: 283-284]、また清野によれば、マレー・ポリネシア文化では、曲がった柄に石または貝をつけた斧が見られるとある [清野 1943]。しかし、今回のデータからはインドネシア、ポリネシアについてはあてはまるが、マレー半島については分布が認められなかった。

3. 枕

枕は、オーストラリアをのぞくすべての地域からまんべんなく出現している。中国南部の出現件数が少ないのは、枕をもっていないのではなく、おそらくあることが当然視されているので文献の上に記載がないものと思われる。枕を使用するか否か、その形状および変遷は髪型と深い関係があると考えられるが、今回調査の項目となった髪型2種（断髪／結髪）に関しては、少なくとも枕の有無との相関性は見出せない。

4. 油脂ランプ

油脂ランプも、枕ほど出現件数は多くないもののオーストラリアをのぞいた他の地域にまんべんなく見られる。

5. 木鉢

木鉢の類の中では、最も出現率の高かったものは脚なし木鉢（70民族）で、東南アジア大陸部に数例、およびインドネシア、フィリピン、台湾、ミクロネシア、ポリネシア、メラネシア、ニューギニアなどにまんべんなく見られた。複数脚つき木鉢は数はずっと減るが（16民族）、おもにインドネシア、ミクロネシア、ポリネシアに見られ、この他にも東南アジア大陸部に2例、メラネシアに2例見られた。メラネシア及びポリネシアでは主にカヴァ容器として使われている。動物形木鉢は東南アジア大陸部ではわずかに1例のみが見られ、この他はインドネシア、ミクロネシアに比較的に見られ、ポリネシア、ニューギニアにも2例ずつ出現した。レイチャード (Reichard, G.) によれば、この型の木鉢はアドミラルティ諸島はじめメラネシアに分布しているとあるが [REICHARD 1969: 9-75]、今回のデータではメラネシアにはわずかに

1 例しか見られなかった。

6. うるし技法

ウルシ科の植物は落葉樹であり，照葉樹林文化となじみが深い。漆（うるし）を使った製品の製作及び使用には適度な湿度が必要とされることとも関係があるだろう。うるし技法は，データでは中国，ビルマ，タイ，ベトナムなどの地域に見られる。ただし，いわゆるウルシを用いているのは，日本や中国などの温帯地域であり，ベトナム，ビルマ，タイなどより南ではウルシと近縁にあるハゼノキを用いていると思われる。製品としては竹かごに塗った籃胎やロクロ細工の木のおわんに塗ったものなどがある。